

# 日蓮宗と仏具

——その受用時期を視点として——

松 村 寿 巖

## はじめに

法華経法師品にはすでに、華・香・瓔珞・抹香・塗香・焼香・絵蓋・幢幡・衣服・伎楽の十種の供養をかけた、また合掌恭敬すべきことを説いているところである。では法華経を依経とする日蓮宗において仏具の受用はいかにあつたか、具体的には、従来の仏具中どのようなものが、いつごろ日蓮宗にとり入れられ、どのようにそれらが使用され、さらに自宗に適合するものを生み出していったかなどを中心にかえりみたい。このことは今日、注目されつつある仏教儀礼とも深いかわりをもつと思われる点からも、一瞥することはあながち徒事ではないと考える。

なお一概に仏具といっても、数珠あり木魚ありといったように多種多様である。そこで石田茂作氏は『新版仏教考古学講座』（第五卷仏具編）の中で、仏具を一、荘嚴具 二、供養具 三、梵音具 四、僧具 五、密教法具 六、その他の六系統に分類されている。しかしここでは集約して、仏具を荘嚴具・梵音具、そしてその他を一括して法具とするこの三つの範疇に分けて記述してみたい。

## 一 莊 嚴 具

莊嚴とは華麗に修飾することを意味し、仏の偉徳をより効果的にするため、仏前の周辺をおごそかに莊嚴するものを莊嚴具という。ここでは天蓋・幡・華鬘・三具足・五具足などをとりあげよう。

天蓋（てんがい） その起源は印度に求められる。『法華経』方便品には「若し人、塔廟の宝像及び画像において華・香・幡・蓋をもって敬心にして供養し」（『法華経』引用の場合、平楽寺本・真訓両読『妙法蓮華経』による）とあるように、天蓋は供養の具として使用されたことがうかがえる。また天蓋は、印度で貴人の上に蓋をかざして歩いたところから発したものとわれ、転じて仏の頭上にかかけられ、後には菩薩にもこれが用いられるようになったものという。これを印度ではチャトラと呼び、天にかけられた蓋の意で、懸蓋<sup>けんがい</sup>・宝蓋<sup>ほうがい</sup>とも称する。

日本への将来は早く、『日本書紀』（巻十九）の欽明天皇十三年（五五二）の条に、百済の聖明王から「猷<sup>く</sup>・釈迦は莊嚴具として各宗に広く普及する。

日蓮宗の歴史資料として出てくる天蓋の記録は、まず日興の『宗祖御遷化記録』の中の「御葬送次第」（『宗全』第二巻所収）の項にみられ、これによると日蓮聖人葬送の式の際に用いられている。すなわち聖人の「棺」のあと「次天蓋 太田三郎左衛門尉」と記述され、葬送を莊嚴する仏具として使用されているのである。ではその具体的な情景を京都本圀寺に蔵される『日蓮聖人註画讃』（五巻本・絵巻形式）によって補足してみよう。この註画讃は円明日澄（一四四〇—一五一〇）の詞書に、天文五年（一五三六）画工洛陽絵所窪田統泰が絵を付したものである。いまこれ

によると形状は小型の箱形天蓋が描かれ、その天蓋の支柱を一人（太田氏）で支え、聖人の棺の上にかざして葬送の式を敷衍するに及んでいる。

また久遠成院日親（一四〇七—一八八）の『伝灯抄』（『宗全』第十八卷所収）にも、天蓋について記載があるので紹介しよう。それは明徳元年（一三九〇）、上総国の埴谷重継の外護によって建立された妙宣寺の開堂供養の際の描写で、「幡（幡）・華鬘ヲ懸ケテ天蓋ヲツリナガラ」とあり、天蓋は莊嚴の仏具として広く普及し、受用されていたことがうかがえる。

なお天蓋は形式の上から分けると、「箱形天蓋」と「華形天蓋」の二種に大別され、その飾る位置、つまり仏の上にかざすのを「仏天蓋」、前机から礼盤までの間にかざすのを「人天蓋」とも分けられることも付言しておこう。

幡（ばん） 幡は仏殿内の柱や天蓋にかけ、また堂外の庭に立て飾って仏菩薩を莊嚴するものである。『法華経』法師品に説く十種の供養のうちの一つに数えられ、同じく方便品にも説示される場所である。また『灌頂経』（第十一）には「我れ今亦た黄幡を造作し、利上に懸著せんことを勤む。福德を獲て、八難の苦を離れ、十方諸仏の浄土に生ずることを得せしめん。幡蓋を供養せば心の所願に随って菩提を成ぜん」（大正蔵二一—五三〇）と、幡の造立と供養の功德を述べている。

中国を経て日本へは仏教伝来とともに天蓋と同じくもたらされたものとうかがえる。先にかかげた『日本書紀』欽明天皇十三年の「幡蓋」の記述、さらに同じく卷二十二、推古天皇三十一年（六二二）の条には「新羅遣大使奈末智洗爾、任那遣達率奈末智、並来朝、仍貢三仏像一具及金塔并舍利、且大灌頂幡一具、小幡十二条」とある。

さて日蓮宗の幡の受用時期については、先に挙げた日興の『宗祖御遷化記録』に、「次幡  
左 四条左衛門尉（頼基）  
右 衛門大夫（宗仲）」

と記述され、同じく『日蓮聖人註画讚』によって補足すれば、一對の幡を各自手に掲げて葬送の際の莊嚴の仏具として描き出されている。これによれば先の天蓋とともに、この幡も日蓮宗において聖人在世中すでに莊嚴の仏具として用いられていたとも察せられるが、聖人在世中使用されたとする確実な資料はない。やはり聖人への敬心の念より遺弟檀越によって、この葬送の式にとり入れられたものか。

**華鬘**（けまん） 華鬘は梵語で俱蘇摩羅くすまらといひ、その発生は野の花を連ねて飾りとし、あるいは貴人に捧げたものが、やがて仏前に供えるようになったものという。とすれば『法華経』法師品に説く十種供養の一つ華の供養はこれに該当しよう。しかし普通、その材質によって銅・牛皮・糸・玉華鬘などとよばれ、これは本来の供養のための生花から、次第に他の材質をもって代用して恒久化をはかり、莊嚴具に転じたことを示すものである。また華鬘は陣・長押ながしなどに懸ける莊嚴具で、その形はおおむね団扇形をなし、唐草文や蓮華文を切り透したものが多く、

日蓮宗の文献資料の中に出てくる華鬘の記載の上限は、日親の『伝灯抄』のようである。つまり明德元年（一三九〇）埴谷の妙宣寺の開堂供養のとき、天蓋・幡とともにこの華鬘が莊嚴の仏具として用いられている。

**三具足**（みつぐそく）・**五具足**（ごぐそく） 香炉・燭台・花瓶の三種の供養の具を三具足といひ、香炉一個、燭台と花瓶各一對を五具足というのは周知のとおりである。この三種の仏具の起源について、『陀羅尼集経』（巻第三）には二十一種の供養が説かれるが、なかでも香水・焼香・雑華・然燈・飯食の五種が特に必要なものとされ（大正蔵十八一八〇四）、『無量寿経』（巻下）では、懸絵・然燈・散華・焼香を挙げている（大正蔵十二二七二）。この香炉・燭台・花瓶の三種を仏前の供養具とするのは印度以来の伝統であるが、この三種の供養具を莊嚴の仏具として同じ卓上に並べるようになったのは中国を起源とするらしい。さてこの三具足を日蓮聖人も莊嚴の仏具として用いて

いたようにうかがえる。但し聖人自身は何らこれに対して述べていないが、おそらくつぎの点から聖人在世時代すでに使用していたのではないだろうか。

まず三島市玉沢妙法華寺所蔵の鎌倉期の作と伝えられる「日蓮聖人説法画像」に、いわゆる一尊四士の宝前の前机の上には、香炉を中心に両側に一对の花瓶が置かれ、さらにその前卓にはこれ又香炉を中心に向かって左に花瓶、右側には構図の配置上隠れているが、おそらく燭台が置かれていたと思われる。なお建治三年（一二七七）三月には池上兵衛志殿の女房が「仏器」を「尼御前大事の御馬にのせ」て身延の聖人のもとに届けている（『兵衛志殿女房御書』定遺一二九三頁）。この仏器は普通、仏に供える供物を盛る器と解されるが、馬の背にのせて運ぶほどの重量といふところから三具足も含めた仏器という意に解したい。すなわち檀越からの寄進によって、法華経巻なり、伊東感得の立像の積尊なりの宝前には、荘嚴具として少なくとも三具足くらいは整えられていたのではないだろうか。また聖人は文永三・四年（一二六六・七）ころから大師（天台）講を始め、同七年には「今年は第一にて候つるに候」（『金吾殿御返事』定遺四五八頁）というほど盛んになり、晩年身延に至るまで教団の中心となる講会であった。この講会の定日にはおそらく天台大師の御影なりが安置され、その宝前には、やはり香炉・燭台・花瓶の三具足が備え置かれていたのではないかと思われるのである。

これらからすれば、三具足はすでに鎌倉期には日本へ到来していたことも物語ろう。なお三具足から五具足への進展は、室町期に至り華道などと結びつき、次第に装飾的色彩を強めて、五具足を生み出していったものようである。

因みに日蓮宗に現存する最古の燭台は、鎌倉長勝寺所蔵の永享四年（一四三二）の銘を有する一对の燭台（高さ一五一センチ、底径二八・一センチ）と思われる。しかしこの燭台の朱漆銘には、

奉施入 極楽寺 講堂 八本之内

永享四年 壬子十二月三日

真言院護摩堂住侶成呼

とあるように、本来長勝寺のものでない。長勝寺文書（「相劔鎌倉石井山長勝寺旧起」）によれば、この燭台は永正年間（一五〇四—二〇）、小田原北条家の家臣遠山因幡守宗為によって寄進されたという。

## 二 梵 音 具

仏教用具として発音する一切の用具を含めたもので、宗教的雰囲気を高めるため用いられるものといえる。堂外の鐘楼に懸けて打ち鳴らす梵鐘や、また堂の軒下に吊るす鑿口、堂内で使用される磬、木魚などその種類は多い。

**梵鐘**（ぼんしょう） 一般に梵鐘は口径一尺八寸以上の鐘をいい、口径一尺七寸以下の鐘は半鐘とよばれ、高さ二尺五寸の鐘を喚鐘といっている。さて梵鐘の機能としては、堂外の鐘楼しゅうろうに懸けて時を知らせることと、その響きわたる音調は仏道精進の心を起こさせ宗教的気分を昂める効用をもつものといえよう。

梵鐘は仏教とともに渡来し、その祖型は中国であり、日本へは朝鮮を経てもたらされた。現存する日本製の梵鐘で最古のものは文武天皇二年（六九八）に鑄造された京都妙心寺のものである。また梵鐘は早くから梵音具として各宗にとり入れられている。

ここで日蓮宗寺院に蔵される梵鐘を挙げて参考に供しよう。平賀本土寺の建治四年（一二七八）、身延山久遠寺の弘安六年（一二八三）、葦山本立寺の元徳四年（一一三三）、安房天津清澄寺の明徳三年（一一三九）などの紀年銘

を有する梵鐘がある。しかしこれらは他宗より後年日蓮宗寺院に移行されたものと考えられる。例えば本立寺のものは東慶禅寺との銘が刻まれ、本来鎌倉の「駈け込み寺」つまり東慶寺のものであったものが、いつの世にか移行したことが知られる。また清澄寺のものについていえば、その梵鐘の鑄造時には天台宗に属していた如くである。それ故これらは自宗用に造られたものとはいえない。では自宗用に鑄造されたものについてつきにみてみよう。

これにはまず中山法華経寺第三世日祐の時代に鑄造された記録がある。すなわち日祐の『一期所修善根記録』（『宗全』第一巻所収）応安四年（一三七一）の項によれば、法華寺（現法華経寺）に「同年五月二十五日大鐘鑄之、檀那等在彼鐘銘」とあり、翌年つまり応安五年七月には「鐘樓堂造営」されたことがうかがえる。また自宗用に鑄造された梵鐘で現存する最古のものは京都本圀寺のものである。この鐘銘によれば文禄二年（一五九三）鑄造されたもので、願主は当寺第十六世究竟院日禎であり、二百余名の僧俗の淨財喜捨によって鑄物師藤原国次戒名道仁が鑄造し、その選文は日鋭の筆管によるものである。なお日興の『宗祖御遷化記録』に鐘についての記載があるがつぎの鑿の項とありあつかう。

**鑿**（ぎん） 鑿ぎんす子とも呼ぶ梵首具であるがその発生については明確ではない。日本では古いもので室町時代末、永祿八年（一五六五）の銘のあるものが、愛知県の妙興寺にあることが報告されている。

さて日蓮宗の文献資料を溯ってみると、日興の『宗祖御遷化記録』の中に「次鐘 太田左衛門入道（乘明）」とある。ここではその形状については明らかでないが、この鐘が鑿または引鑿のいずれかと考えられる。というのは葬送の式で太田氏一人にて運び修するとすれば、半鐘では重すぎると思われる。そこで又『日蓮聖人註画讚』にて補足すれば、それには柄はなく引鑿とはいえない。形状から判断すれば小鑿子つまり小型の鑿である。では『宗祖御遷化記

録』でいう鐘は、鑿と鐘との形状が類似しているところから鐘と記したもののか、また当時小型の鑿を鐘と称していたものかとも思われるが、ここでは即断はさけよう。つぎに諸山に蔵される画像によって、日蓮宗における鑿の受用時期を探ってみたい。

まず富山県高岡大法寺に永禄七年（一五六四）長谷川等伯が描く「日蓮聖人画像」がある。これによると構図は説法図で、聖人は左手に一巻の経巻、右手に檜扇を持ち、礼盤に座している。上方に天蓋があり、卓上には九巻の経巻を中心に向かって右端に柄香炉、左端に小鑿子が描かれている。また山梨県大野本遠寺には、慶長十二年（一六〇七）心性日遠が賛筆を加えた一如日重（一五四九—一六二三）の寿像画が蔵されるが、これも説法画像で、高座上に安座しており、高座上の向かって左端に小鑿子が置かれ、さらに右端に柄香炉、画面の上方に天蓋が配されている。さらにもう一幅、長遠日樹（一五七三—一六三一）の画像を紹介しよう。これは岡山県金川妙覚寺に所蔵されるもので、これも構図は同じく説法の姿で、上方に天蓋、卓上には経巻を中心に向かって左側に柄香炉、そして小鑿子が描き出されている。

これらからして、もし仮に日興が記すところの鐘が鑿であったとしても、広く鑿が日蓮宗に普及しだしたのは室町末期以降といえよう。それはまた説法に必備な用具とされていたともいえる。またここでみる如く鑿の本来の姿は小型のもので、時代とともに次第に進展して大型化していったものだろう。その反対により小型化したものが鈴かねではないだろうか。

引鑿（いんきん） 小さな鑿に柄をつけたもので、中国からの伝来品のようである。『勅修百丈清規』の「法器章」第九に「小手鑿は堂司行者常に隨身し、衆の諷誦に遇へば之を鳴らして起止の節と為す」（大正蔵四八一—一五四）



とあり、この「小手磬」を手にもつ磬の意味で、手磬と呼ぶ説である。のちこれを引磬と称すにいたったものか。

しかし日本への伝来について明確にする資料はない。その形態が小さなものだけに現存するものに無銘のものが多く、奈良の唐招提寺の引磬の附属箱には天文十三年（一五四四）の銘があることが報告されている。日蓮宗においては、近世にはずでとり入れられていたと思うが、それを端的に物語る遺品ないし資料はない。

鈴（りん） 寺院の内仏や在家の仏壇に備え、読経のときに鳴らす小さな鉢形の鳴りものをいう。禅宗で用いたのが始まりというが、その起源に対して必ずしも明確でない。日蓮宗では近世にはずでに使用されていたようである。つまり心性日遠（一五七二—一六四二）の書と伝えられる『千代見草』に、「りんをしばしならし、正念にしづめて、だいもくを、病人の息に合て、はやからず、おそからず、となえてすすむべし。だいもくの間に、りんをならすべし」（岩波日本思想大系『近世仏教の思想』所収）と記述され、鈴の音調によって、病者の精神の安定をはかる効力と、題目の調子をとることをも含め梵音具として使用されていたといえよう。

磬（けい） 磬は導師の右脇机の上に置くのが普通で、その材質は石・玉・銅・鉄などであるが、現在は鉄製が多く用いられる。なお磬はもと中国の古い楽器であるが、これが仏事にとり入れられた時期は不明である。

日本ではずでに正倉院御物中にあり、鉄磬の残欠が現存している。その形状は中央に八葉蓮華文の撞座をもうけその左右に唐草文を配したものである。日蓮宗でも古くより導師の鳴らしものとして使われていたと思われるが、資料的には明確でない。しかし京都本法寺に蔵される長谷川等伯描くところの「日通画像」がある。これは等伯が帰依した本法寺住持日通の死去（慶長十三年八月一〇日）に對し、ただちに日通生前の姿を描き出したもので、ここには合掌の姿で二疊台（にじょうだい）に座し、向かって左側の前方に中啓が置かれ、そのうしろに磬架に懸けられた磬が配

されている。これより推測すれば、磐は近世以前、おそらく室町期末には日蓮宗に受用されていたろう。

雲版（うんばん） その源流は中国の宋代に求められる。『禪苑清規』第六卷「警衆」の項に、「次擊<sup>二</sup>厨前雲版<sup>一</sup>者開大靜也、衆僧齊起」と記し（飯島・佐藤・小坂編著『訳註禪苑清規』二一八頁）、また日本の『永平元禪清規』卷上「弁道法」にも、「方候<sup>三</sup>開大靜<sup>一</sup>所謂厨前雲版、及諸堂前板一時俱擊」（大正藏八二—三二四）とあるように、主として禪宗寺院が用いることが多く、材質は青銅や鉄で作られ、形が雲形をしているところから雲版と称するにいたる。雲版はまた、その用途によって打板・長板・齋板・打飯・板鐘ともよばれ、衆僧の睡眠をさますため、坐禅をやめる合図、齋食の時を知らせるためなど多岐にわたっている。日本最古の紀年銘を有する雲版は、福岡県大宰府天満宮にある文治三年（一一八七）のものである。

さて日蓮宗の雲版については久保常晴氏の著書『仏教考古学研究』に収められる「雲版の研究」に依拠しながら概観してみよう。これによると鎌倉比企谷妙本寺所蔵の雲版は青銅製で、この雲版の刻銘には、

△表▽ 今上皇帝万才

（比企谷） 建武二年<sup>丁丑</sup>

△裏▽ （妙本）寺 三月五日造鑄

大工清原宗広

とあり、日蓮宗で蔵され最古の紀年銘を有するものである。しかしカッコ内の五字（比企谷妙本）は旧銘を削り追刻したもので、久保氏は、その追刻の時を、当寺に蔵する天正九年の厨子、同十年の太鼓より察し、またこの頃寺規も整えられたものとの観点から、この当時妙本寺に導入され、追刻されたものと推察している。また兵庫県尼崎長遠寺

所蔵の雲版も、他宗寺院「豊後州瑞光寺」のものを、改めて自宗用に再刻したものである。つまり題目を追刻し、天正十三年（一五八五）五月十一日の日付を加え、当寺第六世日鎮代に塚口屋源兵衛によって寄進されたものであることが知られる。なお自宗内で作製されたものとしては、名古屋の堀江滝三郎氏所蔵の、かつて所在が尾張上萱津妙勝寺のものと思われる雲版がある。その刻銘には、

奉寄進妙勝寺常住施主

日実

現世安穩

南無妙法蓮華經

後世善処

天文十四乙巳七月吉日 住持日從

とあり、日実は自己の現安後善の祈りを託して鑄造し妙勝寺に寄進したものである。

これらによれば雲版が日蓮宗にとり入れられた時期は室町期、それも限定すれば天文年間以降といってもいいように思われる。なお時代は降るが、元政の弟子で京都深草瑞光寺二世慧明日燈の撰による『草山清規』齋儀の項に、草山では齋粥、茶時、掃除、開浴等の合図に雲版を用いることを規していることも付け加えておこう。

鰐口（わにぐち） 寺院や神社の軒先に懸けてあり、前面に鉦の緒といわれる布繩を垂らし、これを振って打ち礼拝することは周知の如くである。材質は青銅ないしは鉄が多く、扁平円形で鉦鼓を二つ合わせた形に似ている。

鰐口の名称の由来について、寺島良安編『和漢三才図絵』（正徳二年八一七二）刊）神祭仏器の項に「口を裂く

の形、たまたま鰐の首に似たるが故に之を名づくるか」(東京美術・昭和四十五年覆刻)とあるように、この器の口が大きく裂けている形が鰐の口に似ているところから生まれたものと考えられる。しかしその起源については明らかでない。鰐口の在銘のある最古の遺品は、東京国立博物館蔵(長野県松本市にて出土)の長保三年(一〇〇一)のものであるが、現存する古い鰐口の紀年銘をみても多く作製されるようになるのは室町期以降といえる。日蓮宗寺院で蔵する在銘のあるもので古いものといえば、山梨県青柳昌福寺の「永徳二壬戌(一三八二年)正月日」の銘を有する鰐口が知られる。

鏡(にょう) 『法華経』方便品に種々の楽器とともにこの鏡をもって伎楽供養することが説かれている。本来鏡の形には柄があり、鈴に似た体部に丸状のものを入れ振って鳴らす打楽器といわれ、鏡は密教における金剛鈴に先行するものとみられている。しかし『法華経』に説かれる鏡がこれに当るかは不明で、鏡が転化して銅鑼どらになつたとする見解がある。

すなわち龍牙興雲(一一八三五)撰による『持宝通覧』(巻中)鏡の項に、「私に考うるに、今の銅鑼は古の鏡なり。通鑑綱目前編一に曰はく、岐伯(黄帝臣)鏡を作ると。内伝に曰はく、玄は少帝に鉦鏡を鑄て以て雷の聲に擬せんと請う。今の銅鑼はその遺訓なり」と記述する。日蓮宗の場合、鏡は銅鑼の形状をいう。

なお日蓮聖人葬送の式も絵入りで描かれている『日蓮聖人註画讃』(京都本因寺所蔵)には、銅鑼すなわち鏡による聖人への伎楽供養が描写される。しかしこの葬送の情景の依拠たる日興の『宗祖御遷化記録』には、この鏡のことは記述されていない。それだけに註画讃の作者、円明日澄また窪田統泰の生きた時代の葬送風景がここに潤色化され描き出されたといえる。それは又、室町期には日蓮宗にこの鏡による伎楽供養が行なわれていたことを物語ろう。

鉦（はち） 銅鉦・銅盤・鏡鉦ともいい、鏡と同じく『法華経』方便品に「銅鉦」とあり、古くからの法楽の具である。鏡がゴングとすれば、鉦はシンバルといえる。しかし日蓮宗では鉦を廻してから打ち合わせるという独自の奏法にて修している。

なお古いもので現存するものは、建長八年（一二五六）の紀年銘を有する滋賀県の百濟寺に銅鑼と一組の銅鉦があり、京都の教王護国寺には文保二年（一一三一八）のものがあることが報ぜられている。日蓮宗の記録では、鏡と同じく『日蓮聖人註画讃』の聖人葬送の式に描かれるが、日興の『宗祖御遷化記録』には記述がなく、やはり室町期に鏡と同様、伎楽供養の具として用いられていたといえよう。

太鼓（たいこ） 『法華経』方便品には「鼓を撃ち角貝かくはひを吹き、簫・笛・琴・箏くわうそう・篳篥・琵琶・鏡・銅鉦、是の如き衆の妙音、尽く持つて供養し、或は歡喜の心を以て、歌唄して仏徳を頌し、乃至一小音をもつてせし、皆己に仏道を成じき」と、太鼓は伎楽供養の具としての使用をみる。その後、用途に太鼓を打って時を知らせる時報の意も加わり、また雅楽用としてとり入れられ進展をみせる。

現在日蓮宗では、法要開始の合図をはじめ、読経・唱題などの際に用いられる。なお「だんだんよくなる法華の太鼓」と称せられるように、日蓮宗の宗風に合いひろく普及をみた。さて日蓮宗寺院で現存する最古の太鼓は、天正十年（一五八二）壬午菊月吉日の墨書銘を有す鎌倉比企谷妙本寺の太鼓といえよう。

団扇太鼓（うちわだいいこ） 皮ではった団扇形に柄をつけ、ばちで打ち鳴らし、行脚にあたって唱題・読経するために、携帯の便を計って考案されたものである。江戸時代広重の版画などをみると題目講中の人々がこれを手にしている姿を描き出しているが、ほぼ江戸時代中期ごろ、この供養形式が日蓮宗の中にとり入れられ、独自の進展をみせ

たものとうかがえる。

**木魚**（もくぎよ） 木魚の起源は明らかでないが、『勅修百丈清規』巻第八「法器章」木魚の項に、魚は日夜眼を開いているため、木にその形を形どり、修行僧の怠惰をいましめるために用いたとの説（大正蔵四八一—一五六）をはじめ多くの説もあるが、中国の禪宗に起源があるとみられる。

日本では室町時代から使用されたと考えられ、禪宗をはじめ各宗において読経のため用いられている。なお山梨県日下部雲光寺に応永四年（一三九七）の在銘品があることが報告されている。日蓮宗においてとり入れられた時期は室町期以降、あるいは江戸時代からであるかもしれない。遺品また資料が不足で断定はむずかしい。

**木鉦**（もくしょう） 日蓮宗独特のもので、読経・唱題に用いる。その起源について宮崎英修教授の教示によれば、石井日章氏の話として新居日薩（一八三〇—一八八）が孟宗竹の両節をとり下を削って、坐りをよくし、扇子（中啓）の末広の部分をもって、要の部分にてこれをたたいたのがその始まりと。以降檉・楓などを材質にすることで木鉦の音色は明るく、はぎれのよいところから木魚に変わって木鉦を使用する寺院もふえてきた。

### 三 法 具

**数珠**（じゆず） 誦珠・念珠ともいう。一定の数の珠を糸で貫連したもので、元来は、念誦の数を記憶するのに用いたものである。密教興起とともに仏教もこれを採用したものとかわれ、次第に礼拝具として最も普及したものである。なお数珠の功德について『木槌子経』によれば、「もし煩惱障、報障を滅せんと欲せば当に木槌子一百八を貫き以て常に自ら随うべし、若しは行、若しは坐、若しは臥にもつねに当に至心に分散の意なし、仏陀、達磨、僧伽の名

を称して乃ち一つの木槌子を過ぐべし。かくの如く漸次に木槌子を度り、若しは十、二十、百、千乃至百万し、若し二十万遍を満じて身心乱れず。……若しまた一百万遍を満ぜば、当に百八の結業を断除することを得べし」（大正蔵十七・七二六）とその目的と功德を説いている。

数珠の珠の数については經典にもみられるが、基本の数は一〇八である。これを十倍した一〇八〇、二分の一の五十四、さらにその二分の一の二十七があり、他に四十二、その二分の一の二十一などがある。なお基本の数の一〇八は「百八煩惱」といい、人間の煩惱の数を指すものといわれる。また材質についても、金・銀・赤銅・水晶・木槌子・菩提子・蓮華子・香木乃至梅等種類もはなはだ多い。

ではつぎに日蓮聖人の場合についてみてみよう。聖人自身数珠を用いていたことは確実といえる。というのは弘安五年（一二二二）十月の日興筆になる『御遺物配分事』（『宗全』第二巻所収）によれば、聖人使用の数珠を筑前公に配分し托されている。ではどのような形状の数珠を聖人は使用していたであろうか、この点影山堯雄博士は『日蓮宗布教の研究』の中で、聖人のものとして伝えられている数珠を調査報告されている。これによって二点ほど紹介してみたい。

三島市玉沢妙法華寺に蔵されるものは、全長一三六センチで材質は半水晶、鎌倉比企谷妙本寺のものは一四〇センチで水晶製のものである。これによると全長が長大なことと、水晶を材質にしている点に特色をもつ。なお日昭・日朗など直弟の数珠も同書に挙げられているが、やはりそれも長大で水晶製が過半数を占めている。このことは聖人の数珠が長大で水晶を用いていたことが肯定され、また聖人のそれを直弟が踏襲したともいえるよう。

因みに現在、日蓮宗の数珠は装束数珠と勤行など日常用いる数珠の二通りある。装束数珠は七条及び大衣を着用し、

あるいは色衣五条の場合、またその他の時でも中啓を用いる時は装束数珠を用いることとなっている。さらに装束数珠に、水晶のみを用いた本装束と、水晶以外の珠を交えた半装束の別があるが、敵儀の法要には導師は本装束を用いるものとしている。

柄香炉（えごうろ） 置香炉に柄をつけ、運びやすくし、仏・菩薩を礼拝する供養具である。ガンダーラ彫刻の中に柄香炉をもつ仏像があることが報ぜられ、印度にてすでに用いられていたことがうかがえる。中国を経て日本には仏教伝来とともにたらされ、仏具の中でも最古のものの一つという。

日蓮宗においても供養具として早い時期から使用されたと思われるが、今のところ室町末期の資料しか見出せない。それは盤の項でも述べたが、高岡大法寺に蔵する永禄七年（一五六四）、長谷川等伯が描く「日蓮聖人画像」によつてである。これによると聖人は礼盤に座した説法の姿で経卓に向われている。この卓上の向かつて左端に小盤子、そして右端に柄香炉が描き出されているのである。これは当時日蓮宗で行なわれていた説法の様式を表わすとともに聖人画像にも潤色化して描写したものであろう。また山梨県大野本遠寺にやはり説法の姿の「日重画像」が蔵される。これは心性日遠（一五七二—一六四二）が慶長十二年（一六〇七）賛筆を加えた寿像画で、ここにも小盤子そして柄香炉が描き出されている。これらによれば室町期末より近世にかけて説法に必備な仏具の一つとして柄香炉は使用されていたことを物語らう。

扇（おうぎ） 扇には中啓ちゆうけいと雪洞せんとくと檜扇ひおうぎがあり、僧侶の持物として威儀を正すものである。これらは元來、宮中で公卿が夏期に限って用いたものであるが、次第に僧侶も儀式に使うようになったという。しかしこれらがいつごろから僧具として用いられるようになったものか明確でない。



中啓というのは扇子の中ごろから啓ひらいているところからこの名がつけられたともいう。また中啓は白骨しろほね七本を本式とし、或いは十二本のものもあり、これに赤骨・黒骨のものなどもある。雪洞は末広の開き具合が中啓の半分ほどのもので、中広ちゅうひろとも中浮ちゅううきとも称する。檜扇は檜の柾目の良材をうすく剥いだ薄板でつくられたものである。現在日蓮宗では、数珠の項でもふれたが、装束数珠の場合、つまり嚴儀の法要のときは中啓を用い、また略装のとき、つまり素絹五条以下を着用の際には雪洞を使用する場合もあるが、檜扇はほとんど使われていない。しかし文献資料を溯ってみると、檜扇を使っている例が多く見出せる。

例えば文和元年（一一三二）五月七日付の両山（比企谷・池上）第三代日輪より京都妙顕寺の寺主聖人（大覚妙実）宛の書状に、唐墨と筆、そして檜扇一本との記載がみえ、妙実より日輪にこれらが送られたことに対する返礼の状である（『宗全』第十九卷「菴華秘書」四七頁）。このことは公卿との関係浅からぬ京都妙顕寺でまず導入され、僧具として用いられていたことを示そうか、また京都より関東へと普及をみたものともいえようか。なお時代は降り、また前の柄香炉の項でも掲げたが永祿七年（一五六四）、長谷川等伯による説法の姿の「日蓮聖人画像」（高岡大法寺蔵）に、聖人は礼盤に座し、左手に一巻の経巻、右手に檜扇をもっている姿が描かれている。さらに心性日遠が賛筆を加えた同じく説法の構図の日重・日乾の両寿像画（大野本遠寺蔵）にも、日重は卓上に置き、日乾は両手にもつなどそれぞれ檜扇が描き出されている。これからすれば日蓮宗で扇は、南北朝期より近世初頭を通じて主として檜扇が用いられていたようにもうかがえる。しかし中啓もすでになべかむり日親、つまり本法寺開山久遠成院日親（一四〇七—一八八）の画像（京都本法寺蔵）に見出せる。これは弟子日澄が願主となって開眼したもので、ここでは日親は五条の袈裟を着して二疊台に座し、左手に数珠、右手に中啓をもつ姿が描き出されているものである。また天文五年

(一五三六) 窪田統泰によって描かれた『日蓮聖人註画讃』(京都本圀寺蔵)によれば、聖人の手に中啓が握られている情景が多々ある。さらに又本法寺住持日通の死去(慶長十三年八一六〇八)に対し、ただちに生前の姿を合掌の構図の中に描いた「日通画像」(等伯筆・京都本法寺蔵)にも中啓を見出すことができる。

これらからすれば中啓は檜扇より一時期遅れはしたが、平行して用いられていたともいえる。だが説法の際には檜扇を用い、中啓と区別して使われていたようでもある。その後次第にこの中啓、また雪洞の普及によって扇檜が使われなくなり今日に至ったものか、それとも法衣、袈裟との関係上からそのようになったものでもあろうか。

払子(ほつす) その源流は印度で、蚊や虻を払う道具であったが、のち中国の禅僧の間で蚊や虻を払う所から転じて邪魔悪障を払う功德があるとされ、中国禅宗で盛んに用いられた。なお導師に代わって払子を振り、説法する職を特に乗払(ひんばち)と呼んだという。日本でも鎌倉時代以後禅宗で用いたのを最初に、真宗以外の各宗が用いるようになったとする。

日蓮宗では池上本門寺安置の日蓮聖人七回忌、つまり正応元年(一一二八)日持・日淨が願主となって造立した「日蓮聖人像」に、左手には經典の巻き軸、右手には払子を立て持つ。また鎌倉期の作といわれる玉沢妙法華寺所蔵の「日蓮聖人説法画像」にも、膝上に払子を横たえて描かれている。これらからは聖人は払子を常用していたという感をうける。しかし影山堯雄博士が『日蓮宗布教の研究』の中で指摘される如く、聖人の身延生活とてもギリギリ最低の暮らして払子を採用するだけの生活上の余裕は見出すに至らないとし、また遺文にも払子についての言はみられず、日興の『御遺物配分事』の中にもみられないなどの視点から、ではなぜ聖人遺像の持物に払子がみられるかという点においてつぎのように推察されている。

一門家独創の日蓮だけに衆心の教導は、殊の外に重要事であつた筈。この緊要な精神を何等かの形で日蓮の姿の上に遺し伝えたいと思うのは、遺弟檀越としてまことに自然であり至当な念願ではあるまいか。このような願いこそがついに日蓮の遺影をして、精神指導を表現する弘子を持たしめるに至つたものではあるまいか、と提言される。なお聖人が使われたか否かは別として、いずれにしても直弟の中に弘子が導師の象徴的持物としての意識があつたことは言を俟たない。

## おわりに

以上仏具について概観してきたが、ここでまとめとして、大まかではあるが日蓮宗の仏具の受用時期を〔表Ⅴ〕にして提出しよう。なお表の中の法華経の有無とは法華経中に説示されているか否かをいい、聖人乃至直弟とは日蓮聖人もしくは聖人面授の弟子によってとり入れられたものをさす。また遺品・文献資料などがなく即断できないものは、他宗との対比により一応○：○の標記をもって両期にかけた。なお梵音具のところ若干みられることであるが、紀年銘を有する遺品があつてもそこに題目・寺号等のものさしのない場合、それが自宗用に造られたものか、他宗のものか日蓮宗に移向されたものか判別することは難かしい。このようなものも同様の標記（○：○）で示した。

筆者の集めた仏具資料の乏しさもあるが、日蓮宗に伝えられる仏具の遺品は、時代的にも数量からいっても多いとはいえない。やはり折伏伝道に生きた教団の特徴といえようか。また日蓮宗の場合、他宗に比べて仏具の受用時期は遅いようである。しかし荘厳具については日蓮聖人乃至直弟の中でとり入れられているものが多い。だが梵音具はほとんど室町期以降を待たねばならない。まして梵音具が教団の全域に広く普及するのはおそらく江戸期になつ

鈇	鏡	罽口	雲版	磬	鈴	引盤	盤	梵鐘	五具足	三具足	華鬘	幡	天蓋	
方便品	方便品										(法師品)	方便・法師品	方便・法師品	法華經有無
										○		○	○	聖人乃至直弟
		○ ⋮						○			○			南北朝期
○	○	○ ⋮	○	○		○ ⋮	○		○ ⋮					室町期
					○ ⋮	○ ⋮			○ ⋮					江戸期
														明治期

太鼓	方便・薬王品							
団扇太鼓								
木魚					○	○		
木鉦							○	
数珠		○						
柄香炉				○				
扇(檜扇)			○					
払子		○						

てからだろう。この点に関しては、教団の進展とも微妙に関係しているようである。つまり教団の定着、安定、そして伽藍の造営などを経て仏具は導入され、その後、法要儀礼の整備と相俟って仏具はより広く普及していくものと考えられるからである。なお門流によっては、その地盤地域の格差などにもより仏具の受用時期に相違があると思われるが、この点においてもその具体的な面までは言及できなかった。また以上挙げた仏具が、現在日蓮宗で使用されている仏具の全てでないことも記そう。そして又先にも述べたが、筆者の集めた仏具資料の少ないことで不備な点があることだろう。そこで全国各地の諸山には、受け継がれている仏具が蔵されていると思う。これらについて教示いただければ幸甚である。なお本稿の執筆に際し、先学諸氏の論著より多くの教えを受け、また引用させていただいた。ここに参考文献として掲げて感謝の意を表したい。

参考文献

- 石井日章・高橋玄淨編『宗定日蓮宗法要式』 日蓮宗宗務院  
宮崎英修編『日蓮宗信行要典』 平楽寺書店  
雄山閣編集部編『仏教考古学講座』第三卷 仏法具編 雄山閣  
石田茂作監修『新版仏教考古学講座』第五卷 仏具 雄山閣  
仏教文書伝道協会編『法要儀式要具の解説』（『仏教布教大系』第六卷） 仏教文書伝道協会  
影山堯雄著『日蓮宗布教の研究』 平楽寺書店  
久保常晴著『仏教考古学研究』 ニューサイエンス社  
坂輪宣敬「日蓮宗僧の画像について」（『日本仏教』第四五号） 日本仏教研究会  
早見弁静「伽藍・荘嚴具・法具・法服」（『日本仏教基礎講座』7「日蓮宗」所収） 雄山閣  
中野裕道編『日蓮宗の本山めぐり』 本山会事務局  
清水乞編『仏具辞典』 東京堂出版